

GNP 世界第 2 位から 50 年目に思うこと

亜細亜大学 経済学部 教授 土肥原 洋

2018 年は明治維新 150 年に当たる年である。2 月下旬に、短期間ではあるが佐賀市に行く機会があったが、「佐賀城下ひなまつり」が開催され、街中の幾つかの会場では由緒あるお雛様が展示されていた。それとともに、3 月中旬にスタートする「肥前さが幕末維新博覧会」の準備が進められていた。佐賀藩は長崎や長崎港の警備の役割を担っていたので、海外と接する機会が多く、幕末には偉人、賢人を輩出し、国内で最先端の科学技術を有するハイテクの地だったという。「その時佐賀は世界を見ていた」が肥前さが幕末維新博覧会のキャッチフレーズである。博覧会場となる場所を訪れたときに、ちょうどボランティアガイドさんの事前研修の最中であつた。普段は落ち着いた街が節目の年に意気上がっているであろう。

ところで 2018 年は日本の GNP が、当時の西ドイツを抜いて世界第 2 位になって 50 年目に当たる年である。日本の GNP は、1966 年にフランス、1967 年にイギリスを抜き、1968 年についてアメリカに次ぐ規模に達した。高度成長期に入り、神武景気、岩戸景気と歴史的な名称を付けられるようなかつてない好景気が続き、1965 年秋からのいざなぎ景気を謳歌していた時期である。私にはリアルタイムでは、世界 2 位になったニュースの記憶はない。しかし、しばらくして、同年齢の知人が、「西ドイツを抜いたというのが、道路ひとつとっても西ドイツとの違いは大きいし、本当かと思った。」と言っているのを聞いた時、自分の知識不足を痛感した憶えがある。当時の日本の人口は西ドイツの約 2 倍であつたので、一人当たりの GNP は西ドイツの半分になる。GNP では追い抜いても、社会資本や生活水準に差があつたということであろう。なお、その後の経済グローバル化の進展もあり、経済指標として GNP ではなくて、GDP が使用されるようになった。

2010 年には日本の GDP は中国に抜かれて世界第 3 位になった。日本の GDP は 42 年間世界第 2 位の位置にあつたことになる。そして、2010 年にも同様のことが言われた。中国に抜かれても、日本の人口は中国の 10 分の 1 ぐらいだから 1 人当たりによれば、中国の 10 倍はあるのではないかとといった説明である。そして現在、およそ 10 年後の日本の GDP はインドに抜かれて世界 4 位になるとの予想がなされている。

日本の GNP が世界第 2 位になつたのとちょうど同じ頃の 1967 年に日本の人口は 1 億人を突破し、その後も増加し続けた。21 世紀に入ってしばらくして減少に転じた。合計特殊出生率では 1974 年には、人口を維持できる水準を切っているが、平均寿命の伸びなどから、20 世紀の間は人口は増加したのである。国立研究所の将来人口推計によると、2053 年に日本の人口は 1 億人を割ると予測されているので、日本の人口は 86 年間 1 億人を維持することになるのであろうか。その後も人口は減少を続け、100 年ほど後の 2115 年には 5055 万人と大きく減少すると見込まれている。

2012 年末以降日本の景気は回復を続けている。景気拡張期間は、いざなぎ景気の 57 ヶ月間を抜いて、現在戦後第 2 位の長期間になり、今後本年一杯回復が続くと、戦後第 1 位の長さになる。

こうした GDP 統計や人口統計といった統計だけではなく、マインド面の統計をみてみよう。政府が毎年実施している国民生活に関する世論調査によると、国民の満足度は近年上昇しており、ここ 50 年では最も高い。一方、生活の中に感じる悩みや不安は、1990 年代後半から増加しており、近年も高い水準にある。そして悩みや不安の内容としては、老後の生活設計が第一位で、健康面を除くと、今後の収入や資産について、が続く。

世界の中での日本の経済的地位は低下を続け、人口は大きく減少していくが、現状には満足している。悩みや不安は大きい、その内容は将来に関することが多い。これは、目の前で起きる様々な問題には比較的対応しているが、長期的な緩やかに進展していく大きな課題に対して、常に十分な対応がなされていないと感じているからではないか。

「肥前さが幕末維新博覧会」の前記のキャッチフレーズの後には、「そして今、佐賀は未来を見ている」とのフレーズが続く。未来を見るということはどういうことか。将来の不安や悩みの内容は、過去に起因するもの、既に発生しているものが多く、それらが継続した結果であり、現在の問題でもあると言えよう。